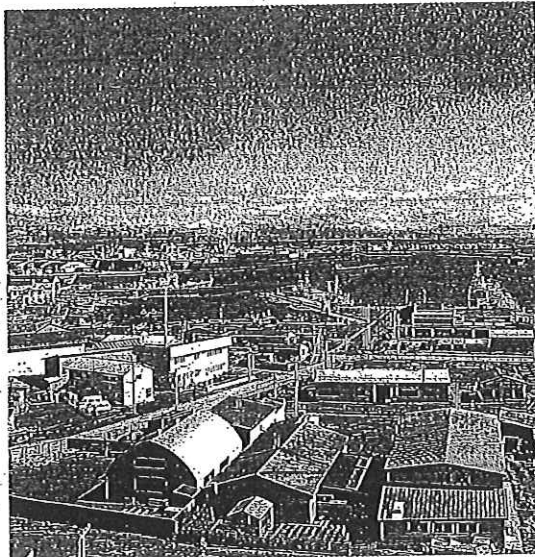


大楽毛物語

5



キンさんとギンさん？

禄高をつぶした鳥取藩士たちが、明治に入って釧路にやってきた。今から115年も前のこと。「10年ひと昔だが、100年以上も前のことになると、キンさん、ギンさんなら話し伝えても普通の人はやっぱり大昔だ。不便のかたまりのように

思ってしまうその頃、一里は4キロなら、ちよつと隣村八里なら32キロ。車なら20分ぐらいで着くが、昔は歩いて半日、一日の話だ。決して大げさでなく不便であったことは間違いない。しかし、便利とかいう感覚は今の人間が勝手に言ってることで、当時の人にとって、それが当たり前。用事を足

すにしても、それだけの所要時間をちゃんと計算に入れていたのだから、それはそれなりに合理的だったのだ。鳥取は日本地図を開いても、詳細な地勢調べとなれば何頁もめくらなければ居所が掴めない。合理的といったって、そんな遠い所から船に乗ってよくだどり着いたものだと思う。そして、これまた今の人間が勝手に推察することだが、どんな荷物を、どんな船に、船で何を食べて、何日かかって、さらにどんな期待をもって来たのだろうか。

何を想うか20歳の青年

船の中に20歳の青年がいたであろう。15〜16歳の若い娘さんもいたことだろう。当時の彼らは「時代」をどう認識し、自分の将来をどんな風に描いていたのだろうか。現代に生きる若者との対比で、きつと何かがわかつてく

るに違いない。その辺のところ不思議であり、とても知りたいところである。キレる若者、教育現場の実態：などと悩める青年が多い現代と、衣食住に欠いた彼らとの間に、何が不足し何が満たされているのだろうか。江戸期のクスリ場所に関する資料を見ると、現在の米町公園からの眺望図がある。遠景に「シヤリ岳」「雄阿寒、雌阿寒岳」が際立つて大きく、描かれていないが、きつと大津やエリモ岬も視界に入っていたと考えられる。

道東の自然を捉える

函館よりエリモ岬をかわし、十勝沖を航海しながら、船乗りたちは洋上から雄阿寒岳を見てクスリ泊まで航海したに違いない。また釧路を出航するときには、両阿寒岳を背に、日高山系、エリモ岬を目印に航海した。当時陸路の函館―釧路は約14

日間もの遠路であったという(厚岸国泰寺、住職赴任の記録)。しかし航路は丸2日で着いた。絵図に戻るが、中景はシリト(知人)岬から西、乾(いぬい北西)にかけて大きく湾を形成し、当時これをクスリ湾と呼んだ。

何と云っても「衣食住」

明治40年代でもここを釧路湾という認識でなく、釧路湾漁業として知人岬以東の桂恋、昆布森地区を外浜漁業と区分けしていた。シラヌカからトンケンに至る長い砂浜海岸では、オタノシケに当たる地点に家が「軒ボツン」と見える。大楽毛は当時人がまだ住んでおらず、昼休所の小屋があるだけだった。何としても衣食住。やっぱり「食」だ。勇躍釧路に乗り込んだ彼らに待っていたのは、鳥取にはない霧であり、肌寒い夏であった。

(つづく)

北海道新聞

(有)丹葉新聞店

釧路市大楽毛5丁目8の1

TEL:57-8228

購読お申し込みは

フリーダイヤル ヨムヨ・ドーシン

0120-464-104

または右記販売所へ